

研究所とのNet Work

所報

Aichi Labor Institute

も：く：じ

- ・ JMIU川本製作所支部の組合活動・・・・・・・・・ p2～
「職場活動・組合活動フォーラム研究会報告」
- ・ 書庫の中に貴重な資料が、失敗談・・・・・・西野 賑郎 p6～
.....
- ・ ーートヨタへの批判と提言ー
東富士からのメール便②・・・・・・スコッチ p8～
.....
- ・ ブログ風“トヨタ漁りの日々”・・・・・・伊藤 欽次 p19～
- ・ 後藤基先生と行く中国雲南の旅、特別報告報告 p24～
(西野賑郎・浅野和也・加藤建二)
- ・ 研究所便り p28



● 第138号
○ 2008年3月15日

愛知労働問題研究所

JMIU 川本製作所支部の組合活動

いま、労働組合の真価が問われている。JMIUは、「憲法・職場・組織建設」を合い言葉に積極的にとりくむ方針を打ち立てている。愛知のJMIUの中心的な組合である川本製作所支部の組合活動についてぜひ聞こうと考え、忙しい中、執行委員の栗生政男(岡崎額田地域労働組合センター議長)さんから話を聞くことができた。そのあらましをここで紹介することにしました。(文責:伊藤)

○ 川本製作所・ポンプメーカー・岡崎工場と全国に支店・営業所をもつ

株式会社川本製作所(1919年創業)は、名古屋市中区に本社を置くポンプの製造業。「川本ポンプ」のブランド名で知られている。工場は、岡崎市にある。生産能力は年間30万台という。従業員は約700人。全国各地に10の支店・58の営業所をもっている。

○ 川本支部(労組)の結成

川本の労組は、1972年11月に結成された。前身は「従業員協議会」で、「結婚しても働き続けられる給料・賃金」をめざして、総評・全国金属労働組合川本製作所支部として発足した。積極的なとりくみで、労働条件はトヨタを大きく超えるまでに向上した。川本支部は、全国にある営業所の組合員を含め、「みんなで相談、みんなで決める」取り組みを徹底。どこより早くパートも組合員にした。要求への回答が不満なときはストライキも打ってきた。もちろん企業基盤の強化にも目を向けていた。自由にものが言える職場になった。働きやすい職場になった。労働者もヤル気になり、企業は飛躍的に発展し、ポンプ業界第2位のメーカーに成長した。

○ 労働組合へのはげしい分裂攻撃

川本支部は、「金属連絡会」(右翼労戦不参加金属連絡会)に1983年参加し、「労働戦線の真の統一」をめざしとりくんできた。

88年9月、川本支部は「連合では労働者の利益は守れない」と、総評・全国金属の脱退。同時に、JMIU(全日本金属情報機器労組)への加盟の方向を民主的な論議をつうじて決めた。全員投票は84.7%と圧倒的多数の支持をえた。が10月、会社は『人事部ニュース』で、「新しい上部団体に加入することは、企業運営上重大な不安がある」などと、ロコツな攻撃をくわえてきた。労組は、11月、県労委へ「不当労働行為救済申立」をおこなった。抗議のストライキも打った。

年明けの89年1月、とつぜん総評・全国金属愛知地本からの攻撃も始まった。ロコツな反共攻撃ビラが門前で配布された。会社の主張と一致した中味だった。会社は、「JMIU加入阻止。できないばあいは第二組合をつくる」という方針をたてた。会社のすさまじい攻撃の中で、労組は89年3月16～31日、全員投票。31日、全組合員・会社役員注視の中で開票。結果、賛成60.7%(222票)、反対34.5%(222票)、白票4.3%、未投票0.5%で、組合規約の2/3以上に達しなかった。上部

団体加入はできなかった。

会社の「賛成はせいぜい3割、反対が7割」という確信を打ち砕かれた。会社は組織分裂に全力をあげた。89年4月4日、早朝の全金愛知地本の組織介入の門前ビラ配布に呼応して、会社は就業時間中に「全国金属川本製作所支部加入届」と「川本製作所労組脱退届」を配り、一人ひとりを脅迫し、署名を迫った。全国の営業所では、異動をちらつかせて署名をさせた。その日の午後、第二組合が結成された。川本労組は、翌日24時間ストで抗議した。本社、工場の73%が参加した。そのごの団交で、会社の第二組合づくりを徹底して追求。ようやく4月24日の団交で「こんご一切組合員への働きかけはしない」という団交議事録確認書を取りかわした。生かし、会社の第二組合育成政策は少しも変わらなかった。

○ 県労委、不当労働行為と断罪

川本のたたかいを大きく包む「川本労組支援共闘会議」が結成された。国労、自治労（現在の自治労連）、愛高教など多くの組合が参加した。

89年7月、県労委は「組合の上部団体加盟についてとった会社の行為は、組合の内部問題に介入した不当労働行為」と断罪した。

7月22日、定期大会は異例の全員大会であった。遠くは北海道の営業所の組合員も、本社の女性組合員も参加した。JMIU加盟投票は、89.9%の圧倒的多数の賛成であった。

会社は、県労委の決定を不服として中労委に再審申立をしたが、そのご「取り下げ」を表明し、労組と「和解協議」に入った。和解交渉は難航した。全員組合員が本社の団交会場に結集するなどの団交をかさねた。和解交渉は2か月後の11月16日「不当労働行為を会社が認め、陳謝すると同時に、今後、一切不当労働行為をおこなわない」と約束の文書を組合に交付した。全面勝利であった。

○ それから19年・川本労組は

いま、川本製作所の労組は、JMIU川本製作所支部は123人。JAM川本製作所支部（第二組合）は504人。（「労働組合名簿 平成十九年版」から）

（*JAMの名称は、Japanese Association of Metal（金属）、Machinery（機械）、and Manufacturing（モノづくり）workersの頭文字によるものです。約1,850の単位労働組合（その支部を含めると2,000を超える単組）が加盟。38万人で連合の中では5番目の大組合。だが、100人以下の組合が組織数の約6割、4分の1が30人以下の組合で占められている。連合に加盟した旧、総評全国金属と同盟・全金同盟などが合体した機械金属の産業別組織）

数の上では、第二組合のJAMの方が多い。その多くは、本社や支社・営業所の組合員が占めている（営業60%、工場30%、本社10%）。工場では、JMIUとJAMの組合員は拮抗している。

○ 川本支部の組合活動の基本

川本支部は、1972年結成以来、とにかく「まずいことは手本にせず、良いことを手本に。要求で・職場に根ざした運動」を心がけてきた。会社からののはげしい攻撃も、こうしたとりくみが、組合員の信頼をかちとってきたと思う。

工場のなかでは、団塊の世代があいついで退職し、3ケタを割ってしまった。JM

IU川本支部は96人。第二(JAM)は、112人。

○ 3年前、職能給の導入で大闘争

川本の賃金は、いままでのたたかいの成果で、レベルの高いものであった。ところが3年前、会社は職能給と査定制度の導入を企図して、多数派の第二組合はこれを呑み、労働協約を締結し、就業規則の変更に合意した。これを川本支部の組合員におしつけようとした。

JMIU川本支部は、ねばりづよく交渉をすすめたが、06年冬一時金交渉後、人事制度改定協議を一方的に打ち切って現行の協定を破棄すると通告してきた。川本支部は、12月1日から22日まで、長期・3週間にわたる工場での「時間外拒否」闘争で抗議した。また、朝ピラや「バンド上限」設定の弊害や実際の賃金はどうなるかを明らかにしたパンフを作成し普及、対話に取り組んだ。

、3年前の賃金改定の強行は、2人の第二組合員がJMIU川本支部に移ってきた。このことから、査定制度など会社案を強行的におしつけたら、第二組合からJMIU川本支部に移る心配と、川本支部の1週間にわたるストライキの結果、「歯止めのかかった成果主義賃金」にまで押し戻した。

○ 高い労働条件を守ってきている

川本の「勤務時間」「労働日数」は、高い条件を維持している。1991年以降、1日の労働時間は7時間25分で、年間労働日数は244日を維持している。1996年度以降の年間所定内労働時間は、1809時間40分となった。

有給休暇の初年度付与日数は11日(1990年協定、労働基準法は10日)。

「時間外労働」は、「1日3時間以内、週10時間以内。月40時間(最大45時間)。年間360時間」を「協定」している。割増賃金は、30%。休日出勤は40%。深夜勤務の時間外割増は65%、を協定している。

健康保険と厚生年金の負担割合は、2004年春に「後退」させられたとはいえ、2004年8月分以降、使用者負担60%、労働者負担40%となっている。雇用保険料も、同様の負担割合となっている。

また、病気休暇は6カ月まで認められている。そのごは病気休職となるが、休職が可能なのは「33カ月」。それもいままでは「休職」中、賃金は全額会社負担だったのだが、06年の改悪で60%負担に切り下げられた。

工場の食堂は、かつては直営で従事者は社員だった。いまは委託になった。しかし、食堂に従事する人・パートの賃金は時給最低1,000円である。

○ 闘争中の組合活動

07年年末、3カ月分(150万円)以上の一時金闘争で、半日、半日、2時間と3回ストを打った。地本や中央から激励に来てもらおうと考えたが「150万円要求」をしている手前遠慮した。

闘争中は、週2~3回、工場内の12職場毎から組合員が1時間早く出てきて、2組の組合員にも「おはよう」と声をかけて、団交報告のピラを門前で配布をする。"JMIUはこう考えている"ことも必ず知らせる。

回答がでたとき、ストをやるとき、必ず第2組合員の反応考えて、交渉やストライ

キのやり方を考える。賃金・人事制度の改変のときでも、いわゆる出世街道から外れている多数の人たちの第二組合の労働者は、JMIUのたたかいに期待している。これらの人の声を大切に、共感が得られる範囲を考え、スト、抗議行動を提起している。

1カ月ストを続けられるだけの積立金ももっている。わが組合員たちは、話の分かる人たちで、多少「日和った」方針でも理解してくれる。第二組合員の動向をみて、手を打つところは「打つ」。強い人、弱い人も理解をしてくれる。スト権投票の結果は、批准率90%以上である。

闘争時だけでなく、12の職場ごとの「職場会」は、仕事が終わったあと、毎週ひらかれている。パンとミルクは注文すれば届けられる。そこでの話し合いは、執行委員会などの報告はキチンと伝えられ、職場会で出された組合員の意見や要求は、必ず執行委員会などに集中している。

徹底的に重視して取り組んでいるのが「労働安全衛生活動」である。安全衛生には第一も第二もない。また、JMIU川本は、第二組合員からの「生活相談」にも親身になって相談に応じている。組合は、第二のことばかり一生懸命やっていると批判されることもある。第二の組合員から、信頼されていると思う。

○ 組織建設は「まったなしの課題」

JMIU川本支部は、昨年、組合結成35年を迎えた。「高齢者が増えて「引退」気分が目につきます。また、労働条件の切り下げ攻撃の中で「あきらめ気分」もないとはいえません。しかし、新人事制度・賃金制度の改悪でも、世間では本人の賃下げ例もありますが、川本では闘いと組合の力で賃下げはさせず、一定の水準を確保しました。」(2007年7月、第36回定期大会議案)

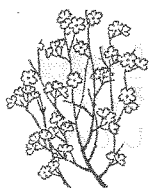
こうしたたたかいととりくみで、どちらが労働者の利益を守っているかは、第二の人にもわかっているのだが、なかなかJMIU川本支部に移るところでは至ってはいない、と話していた。

社員が新しく採用されると、入社3日目に行う会社の研修の際に、時間を取らせて、第一、第二を問わず組合の説明会が行われている。JMIU川本は『真実をしっかりとみつめて、勇気をもって あなたもJMIU川本支部へ』というパンフを配り、「給料袋には労働条件と組合の敵視がついています」「労働組合って?」「なぜ川本にはふたつの労働組合があるのでしょうか?」などが記され、説明している。残念ながら、新入社員からJMIU川本への加入はない。

会社の破廉恥な攻撃の影響である。89年分裂の首謀者・第二組合委員長は、出世して、営業部長になり、05年10月の株主総会で、執行役員となり総務部長となった。団交の窓口となっている。歴代の第二組合の委員長は会社が指名している。委員長を辞めると、つぎからつぎへと出世している。

飲み会でいっしょになると、高校時代の同級生は「川本はよい(JMIU川本労組のおかげ)」、という。こうしたなかで、第二組合員とのつながり・むすびつきをつよめる多様なとりくみがある。例えば、さいきん入社してきた若い人たちら10人でツーリングクラブをつくっている(第1・2人。第2・8人)。

JMIU川本は、いま組織建設は「まったなしの課題」とつよく意識している。



書庫の中に貴重な資料が、失敗談

西野 賑郎

事件をでっち上げて、罪のない地域住民を恐怖に陥れ、踏み絵で自白をさせたとして有名な、志布志事件が、こともあろうに法務大臣の「えん罪でない」発言で再び、脚光を浴びている。

私も裁判所には長いつきあいがある。懐古趣味ではないが、面白い思い出があるので残しておきたい。いまから40年ほど前、中部電力人権争議を準備していた頃の話である。私はいきなり現場から本店勤務に放り出された。普通は本店勤務から現場に放り出すのである。理由は、火力発電所の現場で労働運動に一生懸命だったからである。

うかつにも私は、電力の職場がレッドパージで2千人を超える犠牲者を出し、職場を追われていたことを知らなかった。電気産業労働組合が、戦後の輝く伝統を持った労働組合であり、資本のきびしい弾圧を受けて、壊滅に追い込まれたことすら知らずに、1957年入社していた。

電力会社は大規模開発を急ぎ、火力発電所の建設現場は、劣悪な労働環境だった。名古屋港の中央に造成された9号地は1959年伊勢湾台風に襲われ、大きな被害を受けた。発電所の建設はさらに大幅に遅れた。すべてのしわ寄せが労働者に負わされた。

労働組合が果たす役割は大きかった。9号地は石油基地として建設され、全域火気禁止地域で一軒の食堂も許可されていなかった。日曜日に出勤する労働者の昼食をどう確保するのか、独身者の弁当箱を会社を買わせるために交渉した。夜勤勤務者が昼寝するために、相部屋ではだめだ、と個室を要求した。さらに、部屋のカーテンを暗幕にしろと要求し交渉した。年配の労働者は新しい技術に付いていけず、技術の習得に時間がかかった。ところが企業は、ふくらんだ労働者の数の削減を計画した。労働者の声と正面からぶつかった。

発電所は、世界銀行からのひも付き融資借款で、アメリカGE社製の優秀な機械が輸入されていた。火力発電所の発電機容量や蒸気条件は当時の日本で最高水準だった。

GE社の技術者が常駐して、機械の試運転など指導していた。ところが電力会社の古い体質は、レッドパージを引き継いでいた。労働運動は邪魔者だった。

1966年私はいきなり現場から放り出された。残された組合の三役や執行委員は厳しい弾圧を受けた。不当労働行為から、アカ攻撃になって、さらに陰湿な人権侵害に続くのである。思想差別、人権侵害の撤廃を求めて集団訴訟になり、全面勝利まで23年間続いた。

私が本店に赴任した時、机もポストも準備されていなかった。嫌がらせでやめさせる作戦だと自覚した。負けるわけにはいかない、周りの人たちの雑用を手伝った。ある日昼休みの時間に、書庫で休憩しようと横になっていたら、いろんな書類が箱につ

められていることに気がついた。

何が入っているかとのぞくと、「年度業務計画」だとか「実施報告書」などだった。発電所から提出された「所長報告書」なども積み込まれていた。ペラペラとまくっていくと、なんとなんと「労働組合の健全化計画」として、御用組合を育てる準備や予算が出ているではないか。

全労会議（総評を脱退した右派労働運動・のちに総同盟）時代の労働運動でさえ邪魔になって、無権利の労働者をつくる計画と、どこまで進んだと報告していたのであった。私がいきなり現場を追われた理由がはっきりした。

差別や人権侵害の数々が、計画的に取り組まれていたのである。裁判でいえば、被告の差別意思の立証が、はっきりしたのであった。被告会社は、はじめは企業の社会的責任として、送電線鉄塔のボルトを外すような従業員はいらない（当時四国かどこかでそんな事件があった）と主張したが、どうも分が悪くなって、今度はウソの理由を法廷に持ち出した。原告は成績が悪いから賃金が低く、昇進がおそいと主張を変えてきた。

マル秘の文書もぞくぞく集まってきた。誰と誰をどのように弾圧していくか、体系図である。社会に訴えるため、訴訟が準備された。助走期間は長かったがとにかく原告団 90 人が団結した。岐阜や三重、静岡、長野と中部地方の各地に、闘う仲間が広がった。

しかし、職場の人権侵害は続いていた。訴訟に加わった争議団員には監視役がついた。管理監督者は、優秀な技術をもった争議団員をさけて、会社言いなりの者を仕事の中核につけざるを得なかった。その狭間で苦しんでいた。いま、笑い話のように、当時はこんな風だったと話がだされる。

昨年争議解決 10 周年を祝った。病気で出席できない方や不幸にして亡くなった方もあったが、長期に争議をたたかった仲間には、いろんなとっておきの話があると思う。わたしの未発表の話は、恥ずかしながら次のようなものである。

たくさんのマル秘の付いた文書が出てきて、驚いた私は持ち出すことを考えた。しかし、差別や弾圧をうけていて、企業を相手に裁判を構えても、労働者の悲しさなのか、企業に忠誠義務がある。持ち出さずにコピーを考える。つぎに部長や課長の印鑑がたくさん付いているのをコピーすれば、その人に迷惑がかかると考えてしまう。

労務担当は憎いが技術系の課長に恨みはない。マル秘文書の表紙から印鑑部分をのぞいてコピーした。持ちだしたのもハサミで切り抜いておいた。

のちほど担当弁護士から、「印鑑があればもっと攻めやすかった」と教えられたが、あとの祭りである。

大失敗だが、はじめから争議に強い労働者など存在するはずはない。

（にし の・しんろう／当研究所事務局長）

東富士からのメール便 ②

前号につづいて、スコッチさんからの「東富士からのメール便」を紹介します。

前号は、11月27日から、12月21日までの、8回のメール便を紹介しました。そのごも連日のようにメールが送られてきています。12月のそのごは4回、1月は元旦早々から29回(計41回)を数えています、2月になってからもあいついで送られてきています。今回は、1月3日までの分を掲載する。

<9・10回めのメール・12月22・24日>

(15) 田原工場派遣の頃を振り返る その1

前述の文章でコメダ(喫茶店)の名が出ましたが、そこから話を始めます。

あの頃、月一度は勤務終了後に帰宅途中でコメダに寄りました。当時私は豊橋駅近くの賃貸アパートに住んでおり、そこから自動車通勤でした。

アパートは派遣元が手配したもので、初期費用のみ会社負担。翌月以降の家賃は完全本人持ちで、住居手当の無い待遇でした。

その派遣会社から田原工場勤務は私一人だけでした。トヨタのその他事業所には複数名行っていましたが、田原へは私が新規で初顔だったのです。

派遣会社の担当者はトヨタへの月例訪問を行い、本人に勤務状況確認します。当初は勤務中にロビーで面会していましたが、次第にトヨタの構内では聞かれない事項も多発。それで、勤務終了後にコメダで会うようにしたのでした。

私は当初の業務説明と実務にズレがあったことで、担当営業に長らくクレームを申し立てました。しかし、私の派遣会社経営陣はトヨタ偏重の傾向が有り、私の言い分は聞いてくれないと思っていました。

ただ、この担当営業は上層部意向とは一線を画し、トヨタの派遣受入窓口にお願いはしてくれたようです。ですが、この件に関しては田原の現場の動きは鈍感でしたよ。

派遣終了まで、何ら“カイゼン”はなかったです。ただし、その件に関して配慮不足だったとは、当時の管理職よりお詫びがありました(派遣最終日)。

少なくとも、私の部署では正社員による非正社員へのパワハラは感じませんでした。でも、彼らに悪意は無いのでしょうか、以下のようなことはよく言われました。

「何故正社員にならないの？」→「(私の内心) 好き好んで派遣社員やってんじやない、トヨタが正社員登用してくれればいいだろ！」

「何故結婚しないの？」→「(私の内心) 結婚生活成り立たないような収入だぞ、格差進めた本丸はトヨタだろ！」

その気持ちを口に出して言う事はなかったですけどね。

トヨタ社員というのも結局井の中の蛙なのかなあ、なんて考えました。彼らを取り巻くあらゆるものがトヨタ的な範疇にある為、それ以外を知らないのではないかな。自分、配偶者、親、兄弟、子供、子供の配偶者、親戚、友人、先輩後輩、彼氏彼女・・・皆トヨタ関係。

なるほど、これがトヨタ繁栄に欠かせぬ“人財”システムなのですか！

そして、こういう発言を気兼ねなくしてくるのは大抵の場合、団塊世代の社員でし

た。正社員での終身雇用、昇給昇格、結婚出産が当たり前のようにできた世代です。その人生経験ゆえに、何故今の若い世代はこうなんだとなるのでしょうか。まして、世間では勝ち組とされているトヨタ社員ですからね、私みたいのは絶好のターゲットだったんじゃないかと。

大半の企業ではそうでしょうけど、団塊世代の社員が多いですよ。田原工場もやたらと多かったですよ。いや、多いというよりは年齢層の偏りが極端すぎやしないか、と思ったものです。

で、今ではこの世代の退職が始まっていますから、どうするのでしょうか？ 再雇用も進めているようですが、定年前で相当心身にガタが来ている人も多いそうです。

(16) 田原工場派遣の頃を振り返る その2

トヨタ田原工場は日本国内最大級の規模です。派遣先がここで決まるまで、実は私はこの存在を知りませんでした。愛知県内のトヨタの事業所は西三河だけだと思っていましたので。

クルマ好きを自認する私も勉強不足でお恥ずかしい限りでした。セルシオはここで製造していたのですね。

派遣会社入社時は地元が東富士地区なので、東富士勤務を志望しました。残念ながら、それは認められずに最初は広瀬工場になりかけたんです。でも、広瀬工場の担当者との事前面接（本当はNG、黙認状態）で双方食い違いがわかった。

それでこの件は不成立となり、田原工場の話が回ってきた。こちらの話がまとまり、私は田原工場への派遣が決まったのです。

田原工場は本来豊橋に建設される計画だったようですね（豊橋のどこかは不明ですが）。ベテラン社員の方からそうお聞きしました。しかし、紆余曲折あって結局は田原になったそうです。

でも、操業開始時はその交通アクセスは最悪だったようですね。なるほど、だから豊橋に計画していたんですね。だって、東名ICやR1からかなり走りますよ、田原工場は。

この為にこれまた“トヨタ道路”が敷かれたそうでした。三河港大橋のあの道路がそうらしい。やはりここでも“トヨタの、トヨタによる、トヨタの為の・・・”でしたか。政治とトヨタの利益、道路はその関係がわかりやすいですね。

ただ、田原にトヨタが進出することで確かに財政雇用面での飛躍はあったそうです。

そういう事を聞くと、北海道や東北や九州の政財界がトヨタ詣するのわかりますよ。ただ、アングラな面は何も知らない悲劇はありますけど・・・

(17) 田原工場派遣の頃を振り返る その3

当時の私は品質関係の業務に就いていました。品質といっても幅広い仕事があるんですが、私は市場品質の分野でした。要するに、工場出荷後販売済みの車両についての品質です。

その不具合（部品）が生産工場に送られてくるわけです。で、当然ディーラーや顧客からは改善要求されてですね。もちろん誠心誠意で対応させていただきます。

ただ、トヨタも車種が増え、生産台数が増え、販売台数が増えの現状です。ディーラーやメーカー本社も混乱しているのでしょうか、意味不明な苦情もあります。申請

内容と現物の違いとかね、さらに海外はもっとその傾向が強くなります。

部品の不具合はトヨタ社内で調査するには限界があります。そこで部品メーカーに連絡して調査してもらい、対策を講じていく流れです。その意味では部品メーカーの実力は重要ですよ。それなのに今は本当に絞り上げるだけで、何とも思っていないトヨタが悲しい。

さらに申し訳ないのが、不具合品といいながら調査すると正常品だったりしてですね。これも本当に正常品の場合と、関連部品がNGの場合があるのでどうこう言えないのですが。

ただ、部品メーカーも調査工数を確保して正常品ばかりじゃ何ともね・・・ まあ、不具合品ばかりの方がもっと困るんですけどね。

で、調査結果が何にせよ、報告書としてまとめて頂きトヨタへ提出です。不具合レベルでその納期の長短がありますが、期限厳守が絶対です。

でも、田原工場だけなんではいしょうか、期限超過でしかも沈黙している部品メーカーもいました。そこで、こちらから催促するというわけですが、この業務では嫌な思い出が。

部品メーカーに報告書提出の催促をせよ、と何故か私にばかり振ってくる輩がいました。相手に報告書を求めるのは業務ですから、その事自体は問題ありません。問題は皆で手分けしてやるのが筋なのに、ほとんど私に負わせることなんです。

メンバー全員がそうではないのですが、決まって押し付けてくる輩。サブリーダー的なポジションの年配社員でした。

そのサブが有給休暇で不在の時です。私は思い切ってリーダーにこの不条理を訴えました。リーダーも私のこの不条理なやりとりを横で見てたのですから。

そうすると、このように説明され説得されたのです。

「実は私も彼の態度には手を焼いているが、先輩なので文句も言いづらい。しかし、彼の息子や娘がトヨタ系部品メーカーの社員なので、苦情電話したくないと。」

この電話で子供が不遇に扱われたら嫌だから、他の者が電話すればいいと駄々をこねる。でも、これをいいことに子供と関係の無い部品メーカーへの電話もあまりしない。

君が来るまでは我々にそのトバッチリが来ていて、どうにもならなかった。現状は全く不条理だと思うが、電話交渉も勉強の一つだと思って取り組んでくれ。」

この見解に100%納得はできませんでしたが、状況は理解できました。リーダーやその他メンバーの苦悩も察して、それ以降は苦情を言うのをやめました。

でも、今で言う“KY（空気が読めない）”なサブはそれ以降も私に無茶振りしてくれました。

ええ、このおかげで最後には私はすっかり“報告書の取立て屋”になっていました。前回パワハラはなかったって書きましたが、これはある意味ではパワハラかもしれませんね。

人格を否定されたわけじゃありませんが、トヨタ一門家族の地位を悪用されたような・・・

だけど、多分このサブのようなトヨタ社員ってもっといるんでしょうね。

こうも猫も杓子もトヨタ関係という“トヨタ村社会”ではどうしようもないですね。また、いずれ書こうと思っていますが、この愛知の閉鎖性、排他性、孤立性・・・

モンロー主義って奴です。

良くも悪くも（私は悪い面が多いと思っている）これがトヨタパワーの礎なんでしょうね。

（18） 田原工場派遣の頃を振り返る その4

いや、本当に派遣社員が多かったですね。派遣社員全員が撤収したら、業務がとても回らないと思います。

最近の状況はよくわかりませんが、西三河と似たようなものではないでしょうか？

派遣社員は愛知以外の出身者が多数いましたね。結局トヨタが利用している派遣会社は全国ネットが多いでしょう。

でも、自動車関係の案件は愛知が多いので、全国から送り込んでくるわけです。

その中には当然トヨタでの業務を熱望して故、という人もいたでしょう。一方でトヨタかどうかより、地元での業務を希望している人もいたでしょう。でも、私も含め結果的に皆、愛知のトヨタに派遣されてきたんですね。

だって、世の派遣会社ってトヨタ大好き、トヨタの寄生してナンボですもの。いかに多くの派遣社員を送り込むか、それが大本題。

でも、派遣社員はいくら頑張ってもトヨタ社員に登用はほぼ無さそうです。現に私がそうでしたし、派遣契約が切れずとも転職などで多くがトヨタを離れました。部品メーカー担当者と親密になって、そちらに転職するとか。地元に戻って、トヨタとは関係の無い仕事に就くとか。

もちろん個人の自由ですけど、一方で実はトヨタは損してませんか？

派遣社員の交代、交代で人事の流動化というのは業務の安定感が出ない。引継ぎはするにしても、上手くバトンタッチできなくなりつつあります。この辺りがまた品質情報が伝承不足の要因でもあると察します。

また、派遣社員が優秀でいくら頑張っても、正社員の立場とは対等になれる現実がある。

田原工場の中で仕事としている分にはあまり身分差は感じないかもしれない。でも、品質は特に本社設計部門の正社員にモノを言いにくい風潮がありました。

私の担当業務では設計との接点はほとんど無く、自身の実感はありませんでした。でも、設計とやり取りする田原工場の品質部派遣社員は本当に大変そうでした。おそろく言うべき事の半分も言えてなかったんじゃないですか？

これが品質低下の要因だとしたら、実に困ったものです。自分がその立場だったら、やはり同じ事態に陥ったでしょうし。

もっとも、他事業所や他部門においては誰が正社員で、誰が派遣社員かなんてわからなくなっています。そこに応援社員だとか、部品メーカーからの出向社員だとか、再雇用だとか、もうグチャグチャですよ。そんな中で職場の一体感やモチベーション向上というのはムシが良すぎる。

ただし、トヨタ社員の名誉の為に言っておくと、少なくとも私の周囲の大半は親戚な人でした。また、収入の少ない私の為に焼肉を御馳走してくれたりね。トヨタ社員だから、ケチで冷酷だと思っていたけど、その考えは少し大人げなかったなと反省しました。

<11回めのメール・12月28日>

2007年も間もなく終了です。今年は亥年であり、私も年男でありました。亥年は政変や災害が多いという有り難くないジンクスがあります。残念ながらその傾向は少なからず当てはまってしまいました。

一方、トヨタは世界最大メーカーの座をほぼ確実にしたとの事。あるいは2兆円の利益や日本国内50%シェアなど、数字上は独り勝ち。

でも、その背後にある暗部が少なからず注目された年でもありましたね。内野氏の裁判はその最たるものでしょう。「トヨタの品格」を始めとする幾つかの書籍も出版されました。

2008年はどうなるのでしょうか？ 解散総選挙となると、またこぞってトヨタ（経団連）の自民肩入れが展開されるのでしょうか？

先日の奥田碩氏の内閣特別顧問入りは何か不穏な空気すら感じますが、何にせよ、トヨタの動向には引き続き注視していく必要がありますね。

(19) 田原工場派遣の頃を振り返る その5

あの頃は愛知万博が日々近づいてきた頃です。当然別称“トヨタ博”と揶揄されるだけあって、トヨタ社内でも必死にあれこれアピールしていました。

社内報も万博の広報誌か、とも思えるほどの構成で何とも異様でした。テレビも愛知ローカルは万博、万博の連呼でしたし。

でも、私は愛知万博には非常に冷めた目で見っていました。というのも、この万博は開始直前までは愛知県外とトヨタ系以外では盛り上がりず、その中に私もいたからです。

月に一度は地元に戻っていたんですが、当然盛り上がっていない。東富士研究所社内は仕方なく(?)盛り上がっていたのですかね、よく知りませんが。

帰ったついでに東京や横浜に遊びに行っても、あちらではほとんど興味を持たれていない。愛知万博よりトヨタ博の名が通っていたせい、トヨタの企業博という誤認も散見されました。

以前の仕事仲間で非トヨタ系社員はこんなことを言っていました。「今度名古屋でトヨタ車だけのモーターショーが開催されるんだって？」

開始一ヶ月前位からではないですか、在京マスコミが万博を宣伝し始めたのは。とはいえ、これもトヨタの力が作用したようですね、名古屋へトヨタ自腹で呼び寄せたとか。ただし、在京マスコミは万博そのものよりは名古屋の景気とか文化を取り上げた感じ。名古屋グルメとか、名古屋嬢ファッションとかね。

在京マスコミも名古屋ネタで売り上げを挽回したいのがよくわかりました。ただですね、一般大衆の愛知万博に対する見方は興味深かったですね。

ある大阪万博経験者と話したんですが、以下のように考察しました。ちなみにその方は愛知万博には行っていません。

大阪万博（1970年）→高度経済成長や一億総中流の時代→国民全体の熱狂

愛知万博（2005年）→大企業のボロ儲けや格差社会の時代→“好景気”の愛知県とトヨタだけの熱狂

要するに大阪万博は開催地は大阪でも、国民全体が注目し訪れ、今の充実感と未来への希望を思い描けたイベント。対して愛知万博は圧勝トヨタとその地元民が、自己

陶酔と排他のお得意なモンロー主義イベント。

ひねくれた見方かもしれませんが、万博で見事に35年間の世相推移を感じてしまふんですね。もちろん多くの方はそんなことまでは考えていないでしょうけど・・・

(20) トヨタの世界一について その2

日本一の座に就いてからは長いですが、今度は世界一の座も得るわけです。つまり、トヨタは全世界からその立場を追撃される立場になったのです。

それはナンバーワンたる者の宿命ですから、トヨタは当然受けて立たなければならぬ。

ただですね、今後の世界トヨタの道は決して平坦ではないですよ。ホームグラウンド日本の消費者やマスコミはトヨタに長らく洗脳調教されてきました。

妄信的にトヨタを支持選択する人が多く、それがトヨタのハーフシェアに貢献しました。

でも、トヨタは周知のように後手必勝の会社です。本来他社のパクリやコピーは厳しく糾弾されるべきですが、日本はオリジナリティの尊重に甘かった。

ウィッシュの人気を見ると、特にトヨタのパクリ癖に甘かったようですね。そこにトヨタの強大な販売力があると、狙い撃ちされた先行の他メーカーはどうにもなりません。逆に他メーカーがトヨタをパクるとあまり上手く行かないのですが。

この問題についてはメーカーの邪心より消費者の良心が勝って欲しい。勝ち馬に乗るにたがる事、右に倣えの横並びな事、そんな日本では難しいんでしょうか？

ただ、トヨタもグローバル拡大路線で長らく弱小シェアだったヨーロッパも開拓しなければならない。でも、ヨーロッパではそう簡単にトヨタを買ってはくれないでしょう。もちろん以前よりは伸びていると思いますが、かといってアメリカのようにイージーに選ばないと思います。

自動車を大衆化したのはアメリカ、高品質化したのは日本だと思います。ただ、自動車を生み出し、モータースポーツなどの文化的側面を育てたのはヨーロッパです。また、量産大衆車メーカーも少量高級車メーカーも共存できるのがヨーロッパ。

そういう土壌に生きる彼らからすると、日本車というのは異質で不気味なのかもしれません。特にトヨタはそうではないでしょうか？

当然トヨタは世界一の自動車メーカーとして、自動車文化のリーダーでもなければならない。でも、実はトヨタって自動車文化とは一番遠いメーカーのような気がします。自動車という産業はあるが、文化は無いのがトヨタです。日本の他メーカーも似たようなものですけど、トヨタだからこその機によく考えて欲しい。

渡辺社長や張会長と面識は有りませんが、トヨタのトップから自動車文化は感じない。少なくともその言動からはです。

徳大寺有恒氏の言葉を借りると、“カー・ガイ（自動車野郎）”ではないという事です。彼らはカーガイではなく、単なるトヨタマンです。

トヨタマンの典型がトップでは結局文化が何たるか、考えもしないのでは。

後発の日本はヨーロッパに対して、オリジナリティと自動車文化を体現しないとね。残念ながら彼の地が認めないと、真の世界一とは言えない。

トヨタにそこまでの決意と実行力があるかどうか、私は注視していこうと思います。

<12回めのメール・12月30日>

(21) 2007年が終わります

【世界一の座】 本当に世界最大のメーカーになったかどうかは、年明けに結果がわかるでしょう。実現したとすれば、この2007年は世界の自動車史のターニングポイントとなります。

【国内販売の不振】 世界一メーカーと持ち上げられる一方で、ホームの日本市場はガタガタでした。後半50%のシェアに到達するも市場そのものは縮小傾向だと判断できます。

新車を連発しましたが、この手段も消費者の関心を強烈に動かせなくなりつつあるな、と実感しました。また、こうも連発だとクルマのあらゆる品質や作り手の疲弊が心配です。

これらクルマがいずれ不具合を多発、なんてことにならない事を祈っています。私は相変わらず東京モーターショーに突撃しましたが、こちらも観客動員数は下降しました。

【F1】 単に“世界一のトヨタ”を誇示したかっただけの日本グランプリだった、とも言えます。今までトヨタは商品開発や販売において、“痒い所に手が届く”と世間では思われてきました。

ところが、今回のF1はそれは幻想に過ぎなかったと、少なくとも来場客は考え直したのでは？ 意外な場所でトヨタはボロを出してしまいましたね。

【MR-Sの生産中止】 2006年のセリカ生産中止に続いて、トヨタのスポーツカーが消滅しました（厳密にはセリカはスペシャリティカーですが）。

F1に参戦し、世界のトップメーカーがスポーツカーをラインナップしていないのは情けないですね。

トヨタのスポーツカー下手については後日書く予定ですが、上手下手以前の問題です。情勢の厳しいGMだって、今でもシボレー・コルベットを持っているのに・・・

【ハイブリッドカー10周年】 初代プリウス誕生から10年経過しました。現時点で事実上ハイブリッドはトヨタの独走状態です。

確かにトヨタの実力も認めますが、マスコミもトヨタの広報機関だった事は否定できません。トヨタへの挑戦として、来年以降に登場する他社の新世代ディーゼルに期待しています。

【内野氏の裁判】 “トヨタが変われば、日本が変わる” この裁判及び判決について思うのは上記のフレーズです。

トヨタの“カイゼン”思想は、この世に生きる者への幸福をもたらす為のものであって欲しいですね。

以上、2007年のトヨタをざっと振り返ってみました。年明けには2008年への思いを書く予定です。それでは皆様、どうか良い新春をお迎え下さい！

<13回めのメール・1月1日>

明けましておめでとうございます、本日2008年が始まりました。今年も私見をあれこれと述べていく予定です。御参考にして頂ければ大変ありがたいと思います。

また、それについての御意見・御指導もよろしくお願い致します。

(22) 2008年が始まります

新年が始まった直後なので、今年の予見はこうです。

【新型クラウン】 昨年の東京モーターショーにも出展された、新型クラウンが登場します。初代登場から53年、今回で何と13代目です。

でも、ほぼ4年周期で世代交代しているの、13世代にも及ぶわけですが。4年サイクルのモデルチェンジの賛否は別項で述べるとして、それでも生き延びていますね。

1955年にクラウンが登場した時点で、その後のトヨタの隆盛は予想できなかったでしょうね。世界一メーカーとしてのクラウンは、はたしてどういう位置づけになるのかは興味深いです。

【解散総選挙】 どのタイミングかはわかりませんが、衆議院の解散総選挙になるでしょう。解散総選挙といえば、あの2005年9月のいわゆる“郵政選挙”です。異様なまでに自民肩入れのトヨタが思い出されますが、あの再来となるのでしょうか？

奥田碩は当時はトヨタと経団連の会長として、政界への口出しをしていた。それは大企業や金持ち（早い話がトヨタです）優遇の“格差助長肯定政策”を実現する為のものでした。

最近その奥田氏は内閣特別顧問とやりに就いたとの事で、これは今度の選挙に何か影響はあるかもしれませんね。

ただ、この人事は一般国民には好意的には見られていないでしょう。過去の奥田発言からして彼には“何様のつもりだ”と感じている人が多いのでは。

福田康夫もまた前任の安倍晋三と共に、“KY”な人事センスのようですね。

【北京オリンピック】 またこぞって“TOYOTA”のロゴで溢れるのでしょうか？ オリンピックもまたトヨタの支配下になってきましたね。

まして中国市場に猛アタックするトヨタですから、結構気前良くバラマキするのでしょうかね。

でも、まあ中国側もしたたかでしょうから、いかにトヨタから搾取してやろうかというハラでしょうが。お互いが権謀術数の中での綱引きでしょう。

トヨタは何ととっても、谷亮子選手です。「田村で金メダル、谷で金メダル、そしてママで金メダル」 本人はそう宣言していますし、実現すれば確かに快挙でしょう。過去の実績は認めますし、北京での勝負にも期待しています。

でも、嫌なのはトヨタがここぞとばかり彼女を広告塔で押してくることなんですね・・・

2004年のアテネの時は、私は丁度田原工場にいた頃です。社内報で谷選手がトヨタ幹部への優勝報告、そして凱旋の特集がありましたね。偉業を遂げた彼女に特別仕様のセルシオが贈呈されるなんて噂も出ました。

実際どうなったのかは知りませんが、こういうケースではトヨタもケチりませんね。こういうのを聞くと、確かに北朝鮮のようでありまして。

【F1】 今年も富士スピードウェイ（FSW）が舞台です。本当にこれがラストチャンスだと思って、不転退の決意でトヨタには取り組んでもらいたい。

2009年には鈴鹿、2010年には富士の交互開催予定ですが、鈴鹿も巻き返しを狙っている。

また、地元の住人としてあのような事態でFSWのイメージを失墜させないで欲しい。ジャスト・イン・タイムなどではモータースポーツの楽しみは享受できませんって。世界一メーカーになったのだから、自動車文化伝承の責任も果たしてもらいたいですよ。

<14回めのメール・1月3日>

2日と3日は箱根駅伝のテレビ中継を観戦しました。お正月スポーツの定番ですが、本大会はトヨタが最大スポンサーではありませんね。

関東地区の大学だけの参加だからあまり関心が無いのですかね？ 名古屋大学あたりが参加可能になれば、トヨタも広告出稿してくるのでしょうか？

車両提供はホンダですが、先導の中継車はトヨタ（ダイナ・ハイブリッド）ですね。ホンダにもハイブリッドはありますが、トラックは製造していない。さりげなくトヨタは“ハイブリッドの帝王”を全国に見せつけています。

もっともこの時期のトヨタの関心事は、同社も参加するニューイヤー駅伝なのでしょう。私はトヨタとは逆でこちらにはあまり関心が無いのですが（純粋なスポーツ観戦としては）。そういえば、この大会のことは確かにトヨタ社内報に掲載されていました。トヨタ関係者、愛知県人は箱根よりニューイヤー重視でしょうか？

(23)田原工場派遣の頃を振り返る その6

慣れてしまえばさもないことなのですが、派遣開始時に辛かったのは出社時間。8時始業だったんですが、田原工場への移動時間を考慮してかなり早く家を出ていました。

豊橋駅近くのアパートから工場まで15kmほどですが、朝の渋滞が・・・特に豊橋市明海町の工業地帯への出勤車両と運送車両で混雑が酷い。あの一帯はトヨタ関連が多いですから、出社時刻もトヨタと連動しているわけです。まあ、西三河地区と同じ、いやいやあちらの方がもっと酷いんでしょうが。

その事情から私は意を決して必要以上に早く出社していました。6時半に家を出て、途中コンビニに寄ってからトヨタの駐車場へ。7時15分頃には駐車場にいましたが、すぐには仕事場に入りませんでした。車内で買い込んだ雑誌を読んで、ギリギリまで時間を潰していましたね。何故かという、早々と仕事場に行くと苦手なトヨタ社員の一人がいつも一番乗りで（苦笑）。

本当はフレックスタイムで時差出勤できれば良かったのです。確かにトヨタ社員はフレックスを行使できるでしょう。でも、私はフレックスが禁止されていたのです。私の派遣会社にはフレックスタイム制度がありましたが、派遣先での行使は会社により不可でした。

対トヨタでは契約上フレックスは許されなかったのです。いや、これは私の派遣会社だけではなく、その他多くの派遣会社とも不可だったようです。私はこの件では派遣会社にもトヨタにも矛盾を感じていました。

- ・派遣会社は自社としてフレックス制度があり、トヨタ以外のどこか派遣先では行使できる場合が多い。



- ・つまり、トヨタに派遣されるとフレックスNGだが、その他派遣先ではOKという権利差別がある。

↓

- ・あくまで派遣会社採用時にその権利は保証されているが、派遣先次第で不可という事の事前説明無し（詐欺か？）

↓

- ・トヨタ側が派遣社員のフレックス不可という根拠が不明、正当な理由付けが現場派遣社員には伝わっていない。

↓

- ・給与の問題に比べれば些細なことかもしれないが、こういう格差がまた現場の士気を落としてしまう予感。

ちなみに当時の私は派遣会社の営業担当者にこの件を何度か問い合わせました。でも、トヨタ側との決め事なので・・・ですっと回避されていました。

この方はトヨタ担当歴も豊富で提案もできる方だったんですが、当件はうやむやにされたままでした。これはタブーな事だったんでしょうか、今でもよくわかりません。

フレックスが最初から存在しないと考えればいいじゃないか、という人もいたんですけどね。それにほとんど皆8時始業でしたから、業務上の不都合は特に無かったんですけど。

ただ、急用時に時間差出勤で済みそうな時でも自動的に半休取得せざるを得ず、やっぱりそれは変でした。特に私は派遣会社に入社直後からトヨタ派遣で、有給休暇が付与されていませんでしたから。半年過ぎるまで何とか踏ん張っていたのが実情なんですよ。

（24）田原工場派遣の頃を振り返る その7

豊橋のアパートから田原工場までは自動車通勤でしたが、田原の駐車場は広大ですねえ。まあ、あれだけの規模の工場ですから、従業員も多い為それは当然かもしれませんが。

私の通勤車両はトヨタ車ではなく、日産車でした。派遣社員の通勤車両については特にトヨタへの代替えを押されることはなかったです。

某自動車メーカーでは派遣でも代替えの圧力かけてくるのですが、この点はトヨタも寛大ですね。それは派遣社員に多少売れずとも、世間の多くがトヨタを買ってくれるという余裕からなののでしょうか？

上記のような事もあって、駐車場にはトヨタ車以外もよく見受けられました。また、全国から派遣社員が送り込まれていることもあってナンバーも各地様々でした。そういえば、私の借りていたアパートの駐車場もほとんどが豊橋ナンバー以外でした。

その方たちはトヨタへの派遣ではなく、明海の工業地帯へ行っていた人らしい。ただし、彼らはマイカーは持っていない通勤は派遣会社のマイクロバスでした。その会社のバスがアパート前に朝来ているんですよ、私が出発する頃に。

それにしても田原工場は何て場所にあるんだ！と思いました。その思いは通勤時以上に月一度の帰省時に感じていました。地元へ戻る為に終業後田原工場から直帰していたのですが、東名高速に入るのに面倒でした。

最寄りには豊川インターですが、それでも決して近くはない。本当はトヨタは豊橋工場を作りたかったのだ、という過去も頷けます。物流の上でも効率主義のトヨタです

からね、田原工場は主要道路から遠い。

それに私は上り方向に乗るので、豊川インターからの合流は方角が西側に振れる為に距離的なロスが大きい。そこで国1へ出て（それもかなり時間掛かります）、50 Kmも走って浜松インターから入ってました。

定時で終わっても浜松インターへ90分、東名経て自宅まで90分、計180分で帰宅時は21時を過ぎていました。いやあ、本当にこれにはウンザリしましたよ。豊橋のアパートに車を置いてから、豊橋駅から新幹線で帰るのが正解だったとは思います。

田原工場は陸の孤島なんですね。西三河地区から転勤してきた者が“島流し”になったというのも理解できます。実はこの表現は単にその立地上の事だけでなく、業務上でもそういう立場なんですよ。

全工場対象の品質関係の会議などで本社に集合もあります。その連絡というのはメールで管理職に入り、担当者へと順次展開されていくのが通常です。ところが、あることに管理職がこのメールを見忘れて何も知らないまま会議当日になる。

田原の関係者はこの件を知らされていないので、誰も本社には行っていない・・・そういう緊急事態なのに、本社は田原不在で会議を実施する。

田原には電話連絡で「今日の会議に田原工場は参加されていませんが・・・」と確認してくるだけ。

これが西三河地区関係者なら電話で怒鳴れば、すっ飛んでくる事はできるでしょう。田原メンバーは移動している間に会議が終わってしまいますから、お互い諦めるんでしょうね。こういうケースは後で議事録が送られてきておしまいです。

議事録が閲覧できるだけマシですが、議論の機会を損失しているのは痛いですね。私が気に入らなかったのは、この連絡ミスをした管理職が心痛を感じていないんですよ。この件で私は少なからずトヨタにも官僚主義の兆候を感じました。

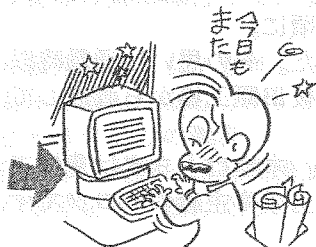
このケースだけで全てを語ることはできませんが、“オールトヨタ”としての連帯意識が希薄になっているのかもしれない。そして、それが品質問題として表面化しているのかもしれない。田原工場ですらこうだと、愛知県外の東富士や東京や東北や九州などはどうなってしまうのでしょうか？

あるいは勢力拡大中の海外拠点はどうなのだ、と今更ながら心配になってきます。世界一は到達しても、正に“灯台もと暗し”ではないでしょうか？

またまた長く書いてしまい、読みづらくて大変申し訳ありません。年末からトヨタ関係の本を少しずつ読み込み、いろいろな思いがあります。

また、書斎の整理などをしていると田原時代のメモなどを発見したりもしました。内容はたいしたものではないのですが、あの頃を思い出すきっかけになりました。では、また次回へと続けますので、よろしくお願い致します。

< 次号につづく >



<ブログ風・「トヨタ漁りの日々」 ③>08年1・2月

ひきつづき、「トヨタ漁(あさ)り」の戦果(釣果)を紹介します(セレクトは独断と偏見)。「トヨタ研究」はもとより、県内の経済・労働情勢を考えるうえでも、役立つのではないかと自画自賛して、つづけます。よろしく。(伊藤)

1月 1日(火曜日) トヨタ自動車渡辺捷昭社長の「年頭所感」



以下は、渡辺捷昭社長の「年頭所感」の全文です。

「近年、企業を取り巻く環境は大きく変化しております。なかでも最大の変化は、地球温暖化や資源枯渇、地球環境問題を契機とした、企業の社会的責任に対する要求の高まりであると認識しております。本年7月には「洞爺湖サミット」が開催され、「ポスト京都」の枠組みについて具体的な議論が行われるなど、地球環境問題は世界の関心を集め、自動車業界におきましても、「地球・社会との共生」が最重要課題となっております。

そうした中、私どもは、昨年、地球や社会の将来にわたる持続的な発展に貢献するための取り組みとして、「3つのサステナビリティ」を追求していくことを発表させていただきました。3つとは、「研究開発」、「モノづくり」、「社会貢献」の分野ですが、本年につきましても、引き続き、この「3つのサステナビリティ」を中心に「環境問題への対応」に取り組んでまいりたいと思います。

まず、「研究開発」すなわち「サステイナブル・モビリティ」の追求ですが、その役割の中心を担うのは、やはりハイブリッド技術です。1997年に発売したプリウス以来、弊社ではハイブリッド車の普及拡大に努めており、世界累計販売は125万台(*2007年11月末現在)に達しています。これによるCO2の排出抑制効果は、推定で500万トンにも及びます。今後は、2010年代のできるだけ早い時期に、年間100万台のハイブリッド車販売を実現させ、その先には「ハイブリッド技術の全モデル展開」を目指していきたいと考えています。また現在、日・米・欧で実証実験を行っていますプラグインハイブリッド車の実用化準備も着々と進めております。こうしたハイブリッド技術を支えているのが電池です。現在、プリウスなどに搭載しているニッケル水素電池に加え、エネルギー密度、出力密度に優れたリチウムイオン電池の開発・生産までの対応を精力的に進めております。さらに、エネルギー面の研究については、弊社のバイオ技術を活用した「セルロース系エタノール」の開発にも着手しています。トヨタでは、このように、クルマだけでなく、インフラやエネルギーも含め、総合的に捉えた「サステイナブル・モビリティ」のあり方を研究しております。

次に「モノづくり」においては、「自然を活用し、自然と調和する工場づくり」を目指す「サステイナブル・プラント」活動を、現在プリウスを生産する堤工場をモデル工場と位置付け、取り組みを進めています。その特徴は、「革新技術の導入とカイゼンによる飛躍的な環境パフォーマンスの実現」、「太陽光・風力などの自然エネルギーやバイオマス等の再生可能エネルギーの活用」、「工場での緑化や森作りを通じた、地域貢献と生態系保護」という3つの観点を踏まえた工場づくりです。こうした「サステイナブル・プラント」活動をグローバルに展開すべく、このほど各地域のモデル工場を決定しました。まず、米州では現在建設中のミシシッピ工場を、欧州ではイギリス工場とフランス工場、アジア地域ではタイのバンポー工場をモデル工場とし、「サステイナブル・プラント」活動をグロー

バルに展開してまいります。

次に「サステナブル社会」に向けての「社会貢献活動」です。弊社では以前より、「トヨタの森活動」として、自然ふれあい体験型の環境教育に力を注ぎ、この10年間で、約2万5千人のお子様方に自然教育を受けていただきました。また、中国やフィリピンといった海外では、積極的に植林活動も行っております。

弊社では、このサステナビリティを追求していく諸活動を、トヨタ「Tomorrow プロジェクト」と名付けることにいたしました。「Tomorrow プロジェクト」というのは、「明日の豊かな地球社会のために、企業としてあらゆる努力をしていこう」という気持ちを込めたものです。この名のもとに、活動を一層強化してまいりたいと思います。

自動車業界は今、いろいろな意味で、大きな転換点を迎えていると認識しております。例えば、BRICS など新興国・資源国での市場拡大への対応、そして、先だって相次いで提示された米国の CAFE 法案や、欧州の CO2 規制案といった新たな規制強化の動きにも対応し得る、地球規模での環境・エネルギー問題への取り組みなどです。こうした情勢の変化に対応し、「変えるべくは変える、守るべくは守る」という判断を、一つ一つ行うことが極めて重要な時期であろうと認識しております。「質の向上なくして成長なし」と常々申し上げておりますとおり、量的な成長は、質的向上の結果としてついてくるものと考えております。そのためにも、「環境保全」と「企業活動」のバランス、また「品質」と「台数」のバランス、こうしたバランスを前提とした成長が企業経営に求められていると実感しております。」

1月7日(月曜日) トヨタグループ、仕事始めで「世界一」へ野心戒め

トヨタグループはきょういっせいに仕事始めを迎えた。グループ各社のトップは、それぞれ、トヨタの世界一に立つのが確実とみられる中で「野心を戒め、さらに技術開発の必要性を強調するトップの訓辞が目立った」と報じた。

1月16日(水曜日) 三菱自・欠陥車をめぐる裁判で企業トップを断罪

三菱自動車製大型車のクラッチ系統部品の欠陥による死亡事故での裁判で、横浜地裁は企業と大生の責任を厳しく問う判決を下し、注目を浴びた。

1月17日(木曜日) 全トヨタ労連、賃上げ「1000円以上」要求

全トヨタ労組連合会(295 労組)は、東京都内で中央委員会を開いた。そこで、2008年春闘で賃金改善要求を千円以上(「賃金カーブ維持分プラス是正分千円以上」と)することを提案。具体的な金額を掲げるのは、02年春闘以来6年ぶりである。

1月20日(日曜日) 「世界一企業トヨタはいま」を、中国の研究者に報告

中国共産党編訳局、中国社会科学院経済研究所をはじめ、中国各地の大学の研究者ら48名が、来日された。目的は、名古屋で「資本論講座」を続けられている首都大学東京の宮川彰研究室が主催、日中友好協会愛知県連、日本福祉大中国研究会の協賛でひらかれる公開中国問題シンポジウム「中国市場経済は今どうなっているか」に参加するためでした。

シンポは午後からで、翌日は、トヨタの工場見学が予定されていることもあって、午前中に「トヨタの実情」を知ってもらう会が開かれたのです。その場に、私が「世界一企業トヨタはいま」ということで、約1時間半報告した。終わったあとと多くの人から質問があったが、時間の制約で、十分答えることができなかった。残念――

1月20日(日曜日) 全トヨタ労働組合第3回大会と「サポートする市民の会」発足

この日午前、全トヨタ労働組合の第3回定期大会がひらかれた。

またその日の午後、「全トヨタ労働組合をサポートする市民の会」結成総会がひらかれた。

結成総会は、＜第一部＞で、①結成にいたる経過の報告／呼びかけ人の紹介、②ATUサポート市民の会の提案／会則、役員、活動方針、事務局体制、他が承認された。

年会費は、一口1000円（2口以上を希望）、また、事務所維持会員を募集：月・1000円以上を確認した。そのあと、③ATUからのあいさつ、メッセージ紹介、代表あいさつ④結成宣言採択、とつづいた。

＜第二部＞に移り、猿田正機さん（中京大学教授・トヨタ研究者）の「トヨタ生産方式・トヨタウェイとATUの役割・責任」という記念講演を聞いた。結成総会終了後、同場所「懇親会」をひらいた。

1月21日（月曜日） トヨタ労組、一時金254万円要求へ

労組は、一時金要求額を「基準内賃金の5カ月分」に、単独決算の営業利益など業績に連動した額を加え、組合員平均258万円を要求する。業績に連動する部分の要求方法は今回から変更し、調整額の上乗せがなくなるが、過去最高の258万円を要求した前年と実質には同水準の要求だという。

1月23日（水曜日） トヨタ、GMに3000台及ばず

各マスコミは、いっせいに、トヨタが世界一を逃したと報じた。この日GMが、昨年の世界販売台数は936万9524台だったと発表。トヨタが1月10日発表した936万6418台（日野、ダイハツを含む）で、わずか3千台の差であった。

トヨタは、小差で「盟主交代」がなかったことを認めた。GMは1931年以来続く自動車業界の盟主の座を守り抜いた格好。トヨタは王者にほぼ肩を並べたものの、逆転は08年に持ち越された。

トヨタは海外の全地域で販売を増やし、特に中国やロシアなど新興国で大きく伸長した。しかし、おひざ元の日本市場は4%減の226万台。計画値を13万台も下回ったのが響いた。これに対してGMはホームグラウンドの北米市場で6%減と振るわなかったものの、中国を中心とするアジア太平洋地域で15%増となるなど新興国で大きく台数を伸ばし、約3000台という小差で首位の座を守った。

生産と販売の世界一が異なったのは、GMが余剰在庫を売りに出たのに対し、トヨタは販売好調から在庫に余裕を持たせていたためとみられる。輸出が多いトヨタの生産台数には、年をまたいで販売される分を含んでいる事情もある、という。

2月 3日（日曜日） トヨタ、世界生産台数はGMを抜いて世界一

中日新聞の報道によると、米自動車最大手ゼネラル・モーターズ（GM）は2日（日本時間）、2007年のグループ年間世界生産台数が前年比1・1%増の928万5000台だったと発表した。トヨタ自動車は既に発表した世界生産台数はグループのダイハツ工業、日野自動車を含め、5・3%増の949万7754台。トヨタはGMに約21万台差をつけ、初めて生産の世界一に立ったことが正式に判明した。

GMは米国市場で大型車の不振が続き、北米生産が前年比8・2%減と落ち込んだ。中国を含むアジア・太平洋地区で17・6%増と伸びたが、世界生産全体では微増にとどまった。トヨタはタイ、中国・天津で新工場を稼働するなど、単独の海外生産が10・5%増と拡大。国内生産も堅調な輸出に支えられて前年並みの高水準を維持した、という。

2月 6日(水曜日) 各紙、いっせいに「収益過去最高 4-12月期」と報道

この日、各紙は、トヨタの2007年4-12月期の連結決算は過去最高だったと報じた。売上高 19兆7,221億円(前年同期比11.9%伸び) 営業利益 1兆8,737億円(同12.3%伸び) 純利益 1兆4,010億円(同16.4%伸び)

これは、アジアなどの新興国の販売増とコスト削減努力によるもので、北米の営業利益は減少したという。

2月 8日(金曜日) トヨタ労組、08春闘で1500円賃上げ要求決定

トヨタ自動車労働組合(6万人、鶴岡光行執行委員長)は8日、評議会を開き、08年春闘の賃金引き上げ交渉で、昨年獲得額を500円上回る組合員1人当たり1500円の賃上げを経営側に求めることなどを正式に決定した。13日に会社側に提出し、3月12日の集中回答日に向けて交渉が本格化する。

トヨタ労組の賃上げ要求は3年連続。昨年も1500円を要求したが、会社側は1000円を回答した。一時金は、基準内賃金5カ月分と業績連動分75万円の計253万円を求める。

鶴岡委員長は同日、愛知県豊田市内で会見し、「仕事で成果を上げているのに、使えるお金は減っていると強く感じる。所得を改善して日本全体を元気にしたい」と、内需拡大に向けた賃上げの広がりが見られる今春闘の意気込みを語った。

自動車大手労組ではホンダが1000円の賃上げ、日産が賃金改定原資として1人あたり平均7000円とともに昨年と同額を要求する方針を固めている。

06年秋に組合員化を開始したパートタイマーと再雇用者の時給に関しては、正社員の賃上げ率と同水準で引き上げるよう求める。期間従業員は、組合員化が4月からのため、待遇改善要求は来年以降とする。

このほか介護保険利用に関して、介護関連事業者などの情報を組合員に提供する窓口の設置や介護休暇を取得しやすい環境整備など盛り込んだ、という。

2月 8日(金曜日) トヨタ総行動実委代表、トヨタ本社などに申し入れ

2月11日の総行動をまえに、実行委員会は、トヨタ本社やトヨタグループ各企業へ申し入れを行った。トヨタ本社への要請は次のようであった。

(1)正社員だけでなくすべての労働者が8時間労働でまともな暮らしができるよう積極的な賃金の底上げをおこなうこと。

(2)ホワイトカラーエグゼンプションの法案に反対すること。貴社における36協定の特別条項を廃止して・長時間・過密労働をやめること。

(3)内野過労死判決で認められた「QC活動」、「創意くふう提案活動」について残業代を払い、サービス残業を一掃すること。

(4)「均等待遇」を守り、期間従業員等の労働条件・福利厚生を改善すること。

(5)2次・3次の関連・下請企業への単価引き下げの押しつけをやめ、原材料の高騰に見合う公正な単価を保障すること。ばく大なもうけを地域社会と関連企業に還元すること。

(6)関連・系列下請け企業に対し偽装請負・偽装雇用を一掃し、労働保険・社会保険への加入など労働法を遵守するよう指導すること。

(7)自動車排ガス公害のぜん息被害者を一刻も早く救済するために、「医療費助成制度」を確立すること。トヨタ等のメーカーは自治体に協力し、社会的責任を果たすこと。

また、この要請には、内野過労死訴訟原告の内野博子さんも参加し、会社にたいして「地裁判決で確定した倒れる1か月前の時間外労働106時間45分を受け入れるよう強く求めた。

2月11日(月曜・祭日) 第29回トヨタ総行動、1200人が参加

この日第29回トヨタ総行動があった。早朝からトヨタ本社や同社が入る名古屋駅前のミッドランドビル前、豊田市た刈谷市駅ターミナル前で宣伝活動が行われた。刈谷駅コンコースでの宣伝活動では、用意したティッシュ1500個は、約50分でほぼ配布を終えた、という。

午後から、豊田市山之手公園で集会があった。7都県1200人が参加した。集会では実行委員会の挨拶や経過報告のほかに、東京大気汚染訴訟原告団や内野裁判の原告、不当解雇とたたかうJMIUティムス分会の仲間などからの挨拶や決意表明があった。

その後決議文採択と団結ガンパローで集会は締め、トヨタ本社にまでデモ行進をおこなった。デモに、内野労災訴訟の原告である内野博子さんが先頭にトヨタ本社まで堂々と行進した。

今年のトヨタ総行動は、全労連の全国レベルではなく、東海北陸ブロック単位としてのとりくみだったが、よく集まった。

2月27日(水曜日) トヨタ労使、08春闘で交渉、賃上げは大へん困難と回答

トヨタ自動車労使は27日、愛知県豊田市の本社で2回目の春闘交渉に臨んだ。組合側は内需拡大の必要性などを根拠に1500円の賃上げを求めたが、経営側は「要求に応えることは大変困難だ」(木下光男副社長)として、昨年の回答額1000円を上回る賃上げは難しいとの見方を示した。

今春闘で組合側はガソリンや食料品など生活用品の値上がり感を強調。『「生活を守る」ことを議論した結果』(鶴岡光行委員長)として昨年実績を上回る賃上げを求めている。だが、この日の団交で経営側は昨年の消費者物価指数が前年比でほぼ同水準だったことなどを挙げ、「もう少し長いスパンで物価動向を見る必要がある」(小沢哲専務)と答え、議論は平行線をたどったという。

トヨタが07年、生産台数で米ゼネラル・モーターズ(GM)を抜いて世界一になった上、徹底したコスト削減による増益基調が続いていることをふまえ、早い段階でベア受け入れ姿勢を示すことにした。同時に、組合側が要求するベア1500円は受け入れない考えも強調したものである。

経営側は「昨年、一昨年の賃上げ分にさらに上積みすることになり、幾何級数的に(人件費が)増える」(木下副社長)と大幅賃上げに否定的。満額回答の可能性は低いとみられ、回答額が昨年の1000円を上回るかどうかが焦点となりそう。最後の団交は3月6日に行われる模様。最終回答日は3月12日となる。

トヨタ労使の交渉の行方は、春闘相場にも大きな影響を与えそうだ。

2月28日(木曜日) トヨタ、2012年世界生産1,130万台へ

この日、各紙はいっせいに、「トヨタ 2012年に世界生産1130万台へ新興国などで大幅増」などと報じた。その内容は、

「トヨタ自動車が、2012年に世界生産台数を1130万台とする計画を策定したことが明らかになった。このうち中国やインドなど新興国・資源国での生産は500万台強と設定、大幅な生産増を計画する。

年間50万台前後の増加と、高い増産ペースが続くことになるが、景気状況や為替動向などを踏まえ「下振れする恐れもある」(トヨタ幹部)としている。

すでに主要なサプライヤーに提示した。トヨタは昨年末に、2010年の世界生産台数を1015万台と設定。新興国市場の伸びなどを勘案し、2012年までの計画では、2010年までの増産水準をやや上回る年間50万台程度の増産を決めたと見られる。

中国の水餃子は特においしい。

西野 販郎

何でもありの中国、みんなで見に行こうという企画は、後藤副所長が留学から戻られた昨年からありました。いわく雲南ツアーです。

1月の会議に諮ってから、すぐ企画を始めました。所員、会員を中心に12名で2コースをつくってみました。気心のしれた仲間と、とても研究所らしからぬ視察団となりました。日本で有名な「餃子」や「大気汚染」、「鉄骨の入らない住宅」など、ふんだんに見てきました。

餃子ですが、雲南省は高地であり、農業の盛んなところでした。食材は多くてとても「注意」するどころか、みなさん食べ放題でした。口の中でとろけるような水餃子は、おかわりして注文しました。

キノコのしゃぶしゃぶも人気のメニューでした。かごに一杯の松茸が出てきました。

現地ガイドさんは、こっちのキノコの方がおいしいよ、と別のキノコをわしづかみにして鍋に放り込んでいました。乾燥松茸がおみやげ品で、手頃の値段であるのですから、どこかの国の松茸騒動とはちがいます。

北京ダックより幾分小さめの、雲南ダックが市場では無造作につるされていました。

食事の時に食べてみたら、名古屋コーチンのように少し硬めでしっかり味が濃く、納得しました。

昆明の名物、過橋米線も変わった食べ方でした。丼一杯のつゆの中に具をいれて、つけ麺風の味を楽しみました。野菜はほうれん草しか解らない私でしたが、油炒め、アスパラのような淡泊な味のさいころ片に斬った食材が、おいしく戴けました。

雲南では、トマトが輪切りで食材として鍋に入っていました。確かにおいしい食べ方でした。ハムのような加工品も、塩味で消費期限を延ばしているような感じがしました。麺と野菜とキノコ、ピーマンもピーナツもニンニクもみんなで食べれば怖くない、これが雲南省の食事だったと思います。

大気汚染も雲南省では全く気になりません。「麗江」という世界遺産に恵まれて、産業は「観光」に絞ったのが、いいのかどうかは別にして、上海や南京のスモッグを嫌というほど見てきましたから、奥地はいいなと感じました。自動車も少なく排気もさほど気になりません。なにしろ高速道に耕運機がノコノコ走っているのですから、何でもありの中国です。

社会汚染？のような光景もありました。航空機が30分遅れても、案内もないとか、誰も並ばない、ひたすら押しのけて進もうとする、ゴミは平気で捨てていく、何処でも声だかに喋りまくるマナーも悪さ。子どもの物売りや、乞食は大都市とちがって少ない方でした。

政府の政策転換で、はげ山が目立ちました。山間の棚田がきれいに耕作されているのに、広大な丘陵地が放置されていました。農地の所有者は耕す本人であって、決して政府や役人であってはいらない、こんなことを見たように思います。

誰かが質問していました。誰も住んでいないあの土の建物はなにか。煉瓦は土を捏ねて焼きます。堅い煉瓦は積み重ねて建物になる。日本でよく見る光景です。しかし、農村では泥を捏ねて天日干しで乾燥させただけで積み上げる、倉庫であって倉庫でない、窓枠も入っていない、不安定な3階建てがあちこちに建っている。鉄骨をぬいた姉歯泥建造物です。みんなが一番興味をしめしたのが、これだったと思います。

講師いわく、補償金目当ての偽装住居だ。農民のささやかな抵抗らしい。社会主義中国の総身に知恵が回らない光景だろう。役人が汚職の先頭に立つのは、日本も同じですが、巨大13億人民中国は相当進んでいるらしい。

雲南省は少数民族が多いという。しかし、良く聞くと大理市では、180万人が白族だという。白い衣装を着けているのが特徴だという。未婚の女性はたすきを掛けているらしい。麗江市のナン族は50万人だという、独特のトンパ文化、象形文字の継承者が先生と呼ばれているという。何億人という漢民族から見れば確かに少数であるが

参ったね、けたが大きい。この比較でいけばアジアでは、10億人のインド、3億のインドネシア、わずか1億の日本人は少数民族？であろう。

玉龍雪山の神々しい美しさに、言葉を失った人が多かったようです。特に朝のわずかな時間帯が、雲を寄せ付けずに輝いていました。麗江の何処までも続く、家並みと黒い屋根、その対比が見る人をうならせていた。

昆明市では西山に登った。現地ガイドさんが、年齢層をみて、いたわりの心でロープウェイを使ってくださった。そのお陰で登龍門を降龍門してしまった。こんな観光客はおそらく少ないだろう。石段の道が幅広い道から次第に狭くなり、さらに急勾配になって1人しか通れない幅になる。競争社会ではなく、均等待遇や自主平等を建て前にする研究所としては、いささか考えてしまう体験でした。後続の友人が足を踏み外して落ちてきたら、それこそともに、傷害保険のご厄介になるであろう、唯一危険地帯でした。ミャンマー、ベトナムが近い麗江市と大理市では、世界遺産に指定されている「古城」地区に宿泊して、静けさを体験しました。ここは贅沢な大飯店らしい。シャワーが出なかったり、水漏れで夜中に引っ越しした誰かさんは、いわば、おまけらしい。テレビがつかないとか、ドアのカギが掛からないなど気にしていたら、雲南省の静かな田舎は楽しめないだろう。

12人の中では、誰1人として飲料水でお腹をこわさなかった。あんなに飲んで、夜中まで飲んで、それでも丈夫だったと聞いた。缶ビールよりミネラルウォーターが高価な国です。白酒45度の国です。誰も下痢もせず熱も出さず、盗難にも逢わず、奇跡の帰国をしたのだから、講師兼現地ガイドの先生に感謝するほかありません。航空機に乗るのに、国内線だとタカをくくって、紹興酒を背負って税関に没収され、悔しかったドジな誰かもこの旅行ではおまけである。（にしん・しんろう／当所所員）

中国・雲南ツアーに参加して

浅野 和也

今回、後藤先生の案内による麗江・大理・昆明をめぐるツアーに参加させていただきました。どのようなところを歩いたかは他の方の文章をごらんいただくとして、私は自身が考えさせられたことについて述べたいと思います。

麗江や大理では、ナシ族やパイ族といった少数民族の人たちの暮らしや文化などの一端をみることができました。もともとは民族の伝統や規律を大切にしながら、生活をしていたのですが、グローバル化や中国政府をはじめとする中央の方針により、資本主義的な生活のためのインフラ整備やそれに伴う「価値観」が広まっているとのことでした。

土産物をはじめとする店舗をわれわれの感覚でみると、「儲かっているのかな?」、「生活できているのかな?」などという疑問を感じてしまうものですが、その見方は「経済的豊かさ」を尺度として用いた、偏ったものでしかないわけです。

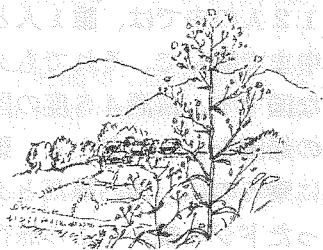
少数民族の人たちにしてみれば、伝統や規律によって「豊かな生活」、「ゆとりある生活」を実践しているにもかかわらず、第三者が「経済的豊かさ」というシステムなどを持ち込むことで、少数民族の人たちに「価値観」をいわば押し付けてしまっているといえます。そのように考えると、『経済的豊かさ』イコールよいものだから、あなたたちもそれに従いなさい」というのは、受け入れる側の意向を無視しており、傲慢であるといわざるを得ません。

こうしたことは理屈としてわかっているけど、いざ目の当たりにし、あわせて後藤先生の話を読みかきとすると、複雑な思いになりました。月並みな言葉ですが「経済的豊かさ」から「心の豊かさ」が大事ではないかということは、何十年も前から言われてきましたが、現在の日本は「心の豊かさ」が大事なのはわかっているけど、先立つものがなければそれどころではない、というジレンマが続いていると思います。

中国の発展・成長はしばらく継続すると思いますが、その成長の仕方に注目していく必要があるのではないのでしょうか。また中国の発展の如何によっては、世界の中でのアジアの位置づけ・存在ということも重要になってくると思います。

最後に、今回ツアーで一緒になった方々と有意義な時間を過ごすことが出来たことに感謝いたします。ありがとうございました。

(あさの・かずや／当所所員)



かけあし昆明 麗江 大理の旅

加藤 建二

今回の旅は、西野さんのきまぐれな自宅へのファックスからはじまりました。観光が主ということで中国少数民族の多い麗江は妻も興味のあるもので、二人で参加しました。中国農業事情に詳しい後藤先生のご案内で、明るく愉快的な11人の一行とともに実りある旅となりました。

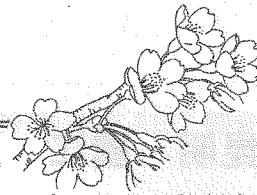
麗江へは3月4日早朝に上海経由で入国し、空路昆明に向かい更に国内線で1時間掛け、到着したのは暗くなっていて、中国の大きさに改めて驚きました。

雲南省は中国西南に位置し、3000 万年前に海が隆起して出来た高山地帯(麗江は標高2300メートル)に26の民族が生活している。年間平均気温は15度で過しやすく、花が一年中咲き、野菜に事欠かない。

翌日麗江市内を観光し、玉龍雪山を遠望し、玉泉公園で雪山の伏流水が湧く黒龍壇の泉を巡りました。5596メートルの玉龍雪山は天に届きそうに鋭くそびえ神秘的でナシ族が信仰している。公園内のトンパ文化研究所で今も使用している象形文字のトンパ文字について説明をしてもらいました。

ナシ族の青や赤の原色の民族衣装を着ている女性が歩く四方街の旧町並みは、世界遺産に指定され、南宋の時代からの石畳と独特のかわら屋根が続き、タイムスリップしたようでした。美味しいヘルシーな、そして日本の味に近い中国雲南料理は、毎回楽しんで頂きました。夜はトンパ文化をより深く知る為に舞踏劇を鑑賞しましたが、日本より歴史が長い中国が民族文化を大事に継承し、さらに国全体は経済発展に向かっていく事に感心するとともに脅威を感じました。(かとう・けんじ/当所会員)





☆2008年1月15日以降の主な活動日誌

〈1月〉20日自動車産業職場政策研究会・中国経済シンポ・トヨタ学習会 27日愛労連臨時大会 〈2月〉8日全労連キャノン本社・トヨタ東京行動 11日第29回トヨタ総行動（豊田市山之手公園）16日第4回所員会議 17日自動車産業職場政策研究会 27日地域総行動 〈3月〉1~2日革新市政の会市民集会 4日~11日研究所雲南省ツアー 13日重税反対統一行動

☆今後の主な予定

〈3月〉16日憲法とくらしを守る春の大集会・自動車産業職場政策研究会 20日イラク戦争反対県民集会 21日女性部会 22日第5回所員会議・徳山ダム導水路見学ツアー 23日働く者の貧困打開をめざすシンポ 〈4月〉12日職場活動組合活動フォーラム 13日トヨタテストコース見学会 16日第69回栄総行動 19日愛知労働問題研究所理事会・第6回所員会議 〈5月〉1日メーデー

☆ホームページで、研究会案内を続けています。http://www.roren.net/romonken

ホームページが寂しいと思います。会員の方で少し技術をお持ちの方のご協力をお願いしたいと思います。論文や英文記事も載せたいと思います。

☆研究所寄贈・購入文献紹介

経済走勢分析(後藤基) 私たちはいかに蟹工船を読んだか 仕事と日本人(武田)

：連合総研資料の紹介：労働CSR・人口減少少子化社会の未来・雇用ミスマッチの分析と諸課題・裸子と雇用の質を高める持続的成長へ・雇用における公平・公正・労使コミュニケーションの新地平

☆今回138号特別号を発行しました。執筆いただきましたみなさまのご協力に感謝いたします。あわせて会員の皆様からの積極的な投稿をお待ちしております。

所報20年誌特別号は、まだ若干部数あります。ご活用下さい。

☆事務所のFAX番号が変わりました。TELと同じ052-883-6978です。

* 「所報」第138号(隔月刊) / 発行日2008年1月15日

* 発行所・編集発行人 愛知労働問題研究所(略称: 労問研)

* 〒456-0006 名古屋市中熱田区沢下町9-3 労働会館304号

* TEL/FAX(052) 883-6978 Eメールai-romonken@roren.net

* ホームページ http://www.roren.net/romonken/

* 研究所会費(年) 個人6000円 団体1口・12000円 * 会員の購読料は会費に含む。収入のない大学生・院生割引あり相談下さい。送金先: 郵便振替00860-6-80604 愛知労働問題研究所/三菱東京UFJ銀行・金山支店・普通口座1368019

* お願ひ: 07年度・会費納入にご協力下さい。

